

極

彩

能村 研三

登四郎・研三展

登四郎の生誕一〇〇年、没後二〇年を記念して市川市文学ミュージアムで「俳人能村登四郎と能村研三展」を開催している。通常展示エリアでの開催であるが、会期は来年の一月二十七日と長く展示期間があることもうれしいことだ。

十年前「文学ミュージアム」の前身の「市川市文学プラザ」であった時に、生誕一〇〇年を記念して「能村登四郎―その水脈―」と題した展示を行ったので、今回の展示は十年ぶりということになる。

また、十月からは特別展示室において文学ミュージアムの企画展で文学ミュージアムの収蔵する、永井荷風、井上ひさし、宗左近などの市川ゆかりの作家の展示も行われる。

今回の展示に合わせて「火の系譜」という図録が作られた。十六頁という簡単な図録だが、今回は私の関係する頁もいたっていた。

今回の図録には「市川が育んだ俳人」というサブタイトルがつけられているので、記念講演では「俳句における定住意識」と題して、登四郎が昭和十三年から亡くなる平成十三年までの六十五年間暮らした市川へ

の思いと、私が昭和二十四年に生まれ現在までの七十二年間についてお話ししようと思っている。

東京をふるさともち春惜しむ

登四郎

臚濃し一生一郷棲まひかも

研三

登四郎は昭和十三年に市川中学に赴任した時から市川での生活が始まり、ちょうどその年から「馬酔木」への投句を始めている。昭和二十三年からの句が収められている第一句集『咀嚙音』には、教員時代の句と家族を詠んだいわゆる境涯句が収められているので、いずれも市川が舞台となった句が多い。

しかし登四郎は六十五年間を市川で暮らしながらも、東京をふるさととする考え方は揺らぐことがなかった。

私は市川で生まれてから、他郷を知ることもなくここまで一郷である市川で過ごし、おそらくこれからも市川で暮らすことになるだろう。

登四郎と同じように仕事場が市川であったことも、市川への思いを強くしていったのだろう。

能村 研三

極彩のハザードマップ土用の芽
一書抜き十書が傾ぐ梅雨の書架
堰口に鷺の漁り喜雨の中
終奏のシンバル一打送梅雨
襟挟むハンカチ白き奏者かな
てっぺんに掉尾の一花立葵
古書店の高き梯子へ祭笛
屋号もて声を掛け合ひ山車を組む
操舵手の日焼の腕の交差せり
夕刊のコラムより読む端居かな